BLACK SOUL

BAR　Gold drops

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＢＬＡＣＫ　ＳＯＵＬ

【Ｎコード】
Ｎ９１１３Ｔ

【作者名】
ＢＡＲ　Ｇｏｌｄ　ｄｒｏｐｓ

【あらすじ】
便利屋ＢＬＡＣＫ　ＳＯＵＬを経営するルカリオのソル。営業の内容は犯罪者の拘束、人物のボディガード、エトセトラ。だが、裏での実態は悪魔を狩るデビルハンター。ある一夜に出会った純血の悪魔であるサンダースの少女、シドから依頼を受ける。シドと出会ったこの日からソルの『本格的営業』が開始された。
これはｆｅｎｒｉｒの本来あるべき物語である。

ミッション０：営業開始（前書き）

ｆｅｎｒｉｒリメイク作品です。

リメイク前ソル「マジかよ。」

ごめん、オレが未熟すぎた。

リメイクソル「やれやれ…」

マッドハルト「寂しくなるねえ。」

書き直すしか手段が無かったんだよ、オレには。では、ｆｅｎｒｉｒ改め、ＢＬＡＣＫ　ＳＯＵＬスタート。

ミッション０：営業開始

６６６６年前、世界を破滅させんとする悪魔の軍勢が現界に押し寄せた。人々という人々が恐怖に陥り、世界は破滅するかと思われた。その矢先、この世界に存在しないはずの人間が来た。人間の名はソロ＝ザ＝ブラックソウル。悪魔でもポケモンでもない、力を持たないはずの人間は悪魔に似た極めて異質な力を有していた。その力の総称は”四騎士”。南の騎士は破壊と速さを司るブリッツ。西の騎士は幻影の炎を司るファントム。東の騎士は時を司るオールド。北の騎士は死と略奪を司るダーイン。この異質なる四つの力の前に悪魔は恐れをなし、逃げ始める。しかしソロは逃がさずに門の直前まで悪魔を追い詰め、狩った。さらに門は開放されたままで魔界にソロの侵入を許してしまった。そして魔界はたった１人の人間により、一度破滅を迎えた。魔界が破滅を迎えた数日後、ソロは己の魂のみで形成されたたった１人の子孫をはるか未来の次元に残しこの星、リールから消え去った。

それから８６７８年後、そのたった１人の子孫は便利屋を開いていた。

チリリリリリン♪チリリリリリリリン♪

ドゴン！！　パシ

ブラックソウル、開店だ

深夜の１２時頃、１人のサンダースが１軒の建物に目を向けた。

「ここね…」

ある一軒の建物に向かって歩いていく。１軒の建物の名は　ＢＬＡＣＫ　ＳＯＵＬだ。

一方ブラックソウル室内では…

「ブラックソウル、今夜は閉店だ。こういう仕事は食いつきがいいな。」

１人の赤黒いコートを着た背の高いルカリオが電話をしていた。受話器を掛けた次の瞬間バカーン！と良い音を立て、扉が粉砕された。

「こりゃあ随分と荒い客が来たもんだな。」

先程のサンダースだ。ルカリオは扉が粉砕されたにも関わらず無反応。

「深夜の少女か、ここに何しに来たんだ？」
「たった1人で表のこの世に存在しない悪魔を狩る男、ソルはあなたね？」

店内を見回すサンダース。ソルと呼ばれたルカリオはサンダースのことを少女と言っていた。つまりこのサンダースは♀のようだ。ソルは言わなくても判るだろう。先程のサンダースの答えにソロは答える。

「ああ、そうだ。で、それで？」
「ひたすら悪魔を狩り続ける…それってどういうことか分かってるわよね？」
「分かっててやってるに決まってるだろ。この仕事は悪魔共の食いつきがいい。邪魔する奴だってその時潰しとけば一石二鳥。敵討ちもできるしな、狩りまくってれば何時かは当たりが来る。」

そう言って壁に掛けてあった両刃の大剣を右手に持ち、切っ先をサンダースに向ける。

「なら…覚悟はいいわね？」

先程の話しの最中、こっそりと手の平に溜めていた稲妻をソルにいきなりぶつけた。

「うあああああああ！！」

電撃が体に激痛を走らせる。怯んでいる間に稲妻を纏ったキックで腹を蹴られ、壁に激突する。ついでに十万ボルトを当てられ、さらに悲鳴を上げる。

「ハハハ！その剣は何のためにあるの！？お父さんからちゃんと剣技は習ってた！？」

まひ状態に陥ったソルにトドメとばかりに刃物が多数置かれたままのテーブルを投げつける。早くも終わりと思われたが、そんなことは無かった…奴は笑っていた。

「剣だって？ハッ☆コイツでもくらってな。」

ソルの腕から黒色の怪物が口を空けて黒い球体を放った。すると大爆発を起こし、店と周りの建物が吹き飛んだ。

「ゲホッ…ゲホ…なんて力なの…」

「オレには生まれつき特異体質の悪魔が宿っている。あんな静電気レベルの十万ボルトぐらいじゃ死なねえよ。さて、お前からは「純性質」の悪魔の波導がするからな、狩らせてもらうぞ。」

コートからｄｉｅｓ（ディエース）と刻まれた白い拳銃と　ｕｍｂｒａ（ウンブラ）と刻まれた黒い拳銃を交差させて構える。サンダースは降参とばかりにため息を吐いて立ち上がる。そしてこう言った。

「力があるのは確かみたいね。でも私は悪魔だけど敵じゃないわ。私はシド。あなたに依頼を頼みに来たの。」

「依頼？悪魔から？」

シドと名乗った純性質の悪魔のサンダース。彼女により、ブラックソウルは本格的営業をたった今開始した。

ミッション０：営業開始（後書き）

リメイクシド「ねえ、あのロリコンジジイと被ってるんだけど。」
リメイク前シド「なあああああんで被ってんのおおお？」

名前消費軽減かな。

リメイクシド「ウォイ！」
リメイクソル「そんなしょうもない理由でか。」

さて、無視でもしてリメイクソルの違いでも言っておこうか。

１性格はヒャッハー！とかハイテンションではない

２ダーインスレイブではなく、今のところ名が無い両刃の大剣。名称はその内記載。

３ディエースとウンブラがリメイクソルの白黒拳銃。

他にもあったかな？ああ、４は魂にまだそこまでの関心が無いってことだな。ではこの辺で…

悪魔狩り編ミッション１：悪魔憑きの人形（前書き）

リメイクミッション１開始でっせ！

リメイクソル「何時までこのリメイクソル使うんだ？」

リメイクシド「私も何時まで使う気？」

リメイクシドは次回からシドにするけどソルは…まだかな。

リメイクソル「ハァ…」

悪魔狩り編ミッション1：悪魔憑きの人形

「フー…で？純性質の悪魔シドからの依頼はこの島に凄む悪魔を狩り殺すこと。それでいいのか？」
「ええ、そうよ。」
ソルとシドはメルア島と呼ばれる孤島、その崖にいた。孤島の周りは断崖絶壁…逃げられるとこなど地上を歩く者にはない。ならばどうやって来たか？ここに来た方法は至って簡単。飛行ポケモンに協力を頼んでここまで連れてもらったのだ。しかし、飛行ポケモンの一種であったピジョットはこう語っていた。
「もうここに連れさせないでくれよ！ここは…ここは…アアアアアアアアアアアアアア！！！！」
発狂でもしたかの様に声を上げて去っていったのだ。ちなみにこのピジョットはメルア島周辺の地元に住んでいた者だ。地元の人々はこの島を恐れていた。何故なら、
「あの大悪魔”ブラックフリューゲル”の住処って話もあるんだってな？」
「ご名答。今もここに居るかはわからないけどね。」
ブラックフリューゲル…大悪魔と呼ばれたこの悪魔に地元の住人は恐れていた。そしてもう1つ、この孤島の中心に点在する巨城、メルア城に入って生きて帰ってきた者は誰一人としていないという事でも恐れていた。ソルは大剣を肩に担いで高々と聳えるメルア城を見上げる。ただ高いだけではない。広いということも思い知らされた。

「こんなデカイ城よく造れたもんだ。尊敬に値するな。」
「さて、私もそろそろ同族を狩るとしようかな。それじゃ、後で合流しましょ。」
シドが稲妻を発してこの場から消えた。
「同行するんじゃねえのかよ。波導で心でも探っときゃよかったぜ…」
皮肉を込めるように呟いて目の前にある門へ歩き出すソル。遠くにある城の塔からは赤、黒の色をし、大鎌と漆黒の大剣を背負い、ギザギザとした黒と紫のローブを着たバクフーンが城の門へと向かうソルを見ていた。
「……いらっしゃい…戦友の子孫、もとい息子さん……」
黒い霧となり、消えていった謎のバクフーン。消えていく際、ギザギザのローブの背後に金色で刻まれた英語の文字が見えた。
Ｉ' ｍ　ｂｌａｃｋ（俺は黒だ）と…
門を通り、城内広間にいたソル。壁は濃い緑色の鉱石で染まっており、一言で言うと不気味だ。
「センスが問われるな。なんだよこの目に悪い環境は?」

ブツクサ文句を言って辺りを見回す。まず中央の奥には大理石で出来たライオンと豚が合わさったような変な石像があった。「キメエ」とコメントして左を見る。左には茶色の扉があった。その扉のところに行き、ドアノブに手を掛けて回す。が、開かない。

「……ふん！」

ドガン！と渾身の力を込めて扉を蹴る。……扉は開かないどころかめり込みもしなかった。

「律儀に解錠式の封印結界なんか張りやがって…仕方ねえ、鍵を探すか。」

諦めて別の扉に向かう。次に向かった扉は青色の扉だ。こちらもドアノブに手を掛けて回す。

カチャ、キィ……

「ここは開くか。おっと、…何もねえじゃねえか！」

扉の開いた先はただの真っ暗な空間。波導も感じ取れず、本当に何もない。魔力を除いては…

「ちっ、ここも何か必要かよ？クソ…」

扉を閉めて扉を殴る。そしてめり込まない。最後に蹴って中央にあった階段を上って別の扉を開ける。全く、八つ当たりもいいところだ。

腹を立てながらもう1つの緑色の扉を開ける。今回扉の先には見え

たのは武器が多々並ぶフロアだった。武器以外にも何故かボートが天井に吊り下がっていた。そしてバイクまで。

「この城、絶対誰か住んでるよな。なんで近年の物が置いてあるんだよ…」

もう確定。絶対居る。誰か絶対居る。近年の物ある時点でもうアウトだっつうの！しかもＰ〇３と３〇Ｓまであるしよ！バーカ！アホ！ワーイ、マンボ！！デッドスパイク！！と訳の分からない事を頭の中で考えて探索を再開する。ボートの吊り下がっている奥の空間を見てみると奇妙な文字が並ぶ円盤が壁に付いていた。

「これは…昇降床か。まだ動くな。」

手を翳して円盤に手を付ける。少し時間が経つとソルの立っていた床が上に向かって昇り始めた。

昇降床が昇り終わり、このフロアで目にしたものは…

「ワオ……」

土色のフロア全体に等身大の天井に吊り下がり、壁の回りにも等身大の人形が壁にもたれる様に体を曲げている。目は悪魔の象徴と言える黒…これまた不気味だ。

「うへぇ、おっかねえ。さっさと鍵を探すに限るな。」

声は怖そうにするが心底は「この程度かよ。」と恐怖に全く駆られていない。人形を押し退けて奥、奥へと向かう。しばらく人形を押

し退けながら進んでいると通路のど真ん中に黒い服を来た等身大の人形がいた。円盤のようなものが先端に付いている鍵を右手に持って吊られている。この人形の目は緑色になっていた。顔を歪ませて人形を見る。

「怪しい、絶対怪しい。魔力も波導もガンガン反応してるし。ここまでにいた人形からも魔力の気配はしたが…うーむ、とりあえず鍵取れってことだよな？取ったら絶対動くだろうがな。」

乱雑に人形から鍵を奪い取る。一定の距離を置いて人形を睨みつける。睨みつける、睨みつける…動かない。

「……見当違いか？」

背を向けて昇降床に向かおうとしたその時…後ろからナイフが飛んできた！ステップをしてナイフを避け、後ろを見る。後ろには何時の間にかナイフを手に持った黒服の等身大の人形が一人でに動いていた。

「ハッ、ですよねー。」

カチャン…カチャン…

「あー…万事休すってやつだな。」

周りを見ればナイフ、剣、ボウガン、槍、斧などを持った等身大の人形がソルを囲んでいた。そして一斉に武器をデタラメな持ち方をしてソルに襲い掛かった。背中に背負っていた大剣を引き抜き、力任せ気味に水平に振る。前方にいた人形が剣圧で吹き飛ばされ、ガシャン！と音を立てて倒れる。最前列にいた人形は黒い液体を撒き

散らしながらバラバラになっていた。

「神速。」

技の神速を発動して周りに群がる人形を片っ端から片付ける。ボウガンを持っている人形はソルが通過した場所を撃っているため、別の人形に当たっている。槍を持った人形は槍の意味が全く無く、ただ乱雑に「よっこらせ」という様に突きをするだけ。

「馬鹿かテメエは？」

そんな馬鹿人形を大剣でホームランする…勿論バラバラだ。後ろから剣を振りかぶろうとする人形がいたが、後ろ蹴りをされて攻撃がキャンセルされる。

「おらよ！」

右ストレートが炸裂。やはりバラバラになる。左右から斧が振られるが所詮は縦振り。前方に軽くステップして避ける。それと同時に回転蹴りをして後から掛かってきた人形ごと薙ぎ払う。

「弱いな。銃弾だけでも死ぬんじゃねえのか？」

大剣を背に背負い、５本指のシャドークローを発動しながらコートからディエースとウンブラを引き抜く。そして人形に一斉掃射をする。大半の人形が銃創だらけになり、力無く崩れる。その中で銃弾で崩れなかった人形が数体。残ったのは緑の目をした複数の人形だ。

「鍵持ってた奴以外にもいたのかよ。」

剣を持った人形が変な走りをしながらソルに迫った。最初に突きが行われ、体を捻って避ける。

「死ね！」

大剣で上から振りかぶって脳天を叩き斬る。黒い液体を撒き散らしてその場に倒れる。緑の目をした人形の内の1体。次に斧を持った人形が回転しながら斧を振り回してくる。

「コイツも馬鹿か。」

あらかさまに隙だらけ…シャドークローを発動させ、ディエースで斧を持った人形の頭部を連続して撃ち抜く。5発以上くらったところで体が崩れ落ちた。最後に鍵を持っていたあのナイフを持った人形がまた奇妙な走りをして迫り来る。距離が近いため大剣を引き抜き、横に振る。ナイフで防がれ、人形が至近距離でナイフを飛ばす。

「あぶね。」

体を横に捻って避ける。同時に腹を蹴って飛ばし、トドメに頭部を左手に持ったディエースで撃ち抜く。5発では死ななく、１０発程度でやっと死んだ。

「周りを見ればあら不思議。人形の死屍累々だな。やったのはオレだけどな。」

辺りに広がる人形の死体を見回した後、先程の昇降床に乗り、下に向かって行った。

今まで来た道を辿り、あの茶色の扉のところに来た。鍵穴に鍵を差し込んで回す。

「よし、開いた。」

カチリと音を立て、黒色の魔法陣が一瞬浮かぶ。魔法陣はガラスのように砕け散って消え去った。ドアノブに手を掛けて扉を開ける。ようやく扉が一つ開き、次に進めるようになった。

さあ、次回へ移行だ。

悪魔狩り編ミッション1：悪魔憑きの人形（後書き）

ミッション1コンプリートです。

リメイクソル「人形弱すぎ。」

弱いのは最初だけ。次から結構苦労するからな？

リメイクソル「そりゃ楽しみだ。失敗しなきゃいいがな。」

ぐおおお……この皮肉屋め…

便利屋編ミッション１：マフィア捜索開始（前書き）

さて、悪魔狩り編もあるけど今回は表でのソルの活動を覗いていこうと思います。時系列はシドが来る数日前です。

リメイクソル「普通の奴らと相手にするなんてな。」

時々例外も有りだけどな。今回はあのマツケン野郎が来ます。では

便利屋編ミッション１！！

便利屋編ミッション1：マフィア捜索開始

「そう、何時ものサンデー…ベルギーチョコケーキのスーパーチョコレートサンデースペシャルに決まってるだろ。後、ベーコン&ブラックペッパーのチーズミックスピザもな。ああ、ヘルシーコンソメサラダスープもだ。忘れんなよ？」

カチャーンと電話機に受話器を投げて音を立たせる。何故かしっかり留まっている。現在ソルはダルそうに机に足を乗っけている。

「ちょっと～ワタシの話聞いてんのー？」

応接用のソファーに思いっきり寛いで新聞紙を読むヨノワールがいる。さて、一体誰だろうか？

「うるせえな、聞いてるっつーの。マフィアを追っかけて壊滅させて欲しいだろ？依頼内容は。」

「そうだよー？でもさー、なんですぐ行かないん？」

「朝飯食ってねえからだ。ピザとコンソメスープ、サンデー食ったら行くから、お前さっさと出ろよ…情報屋マッドハルトとやら。」

どうやらこのヨノワールは情報屋のマッドハルトと言うらしい。マッドハルトは頭をバリバリ掻きながら机に置いてあるインスタントコーヒーを飲む。すぐに飲み干してしまい、ため息を吐いて新聞を置く。

「そーれがすぐに出る訳には行かないんだよね～。君は我々の業界では不人気だからさー。仕事は良くこなすけど…結構サボるとか、仕事遅いとかさー、だから君がちゃんと仕事に行くまで見張るって

わけ～。」
「おい、どこのどいつだ。そんな評判流した奴は？サボった覚えはねえぞ。仕事もノロノロだと？誰かの捏造だろ。」
ソルは現在マッドハルトの証言に不機嫌まっしぐら。が、これらは全て事実である。ソルは結構スローペースなのだ。特にこういった依頼の部類ではイチイチ買い食いをして仕事が鈍くなることが多い。依頼は殆ど完遂できるが、それまでが長いのでは評判はよろしくなくて当然。
「うーん、まあそれはそれとして。言うことあるんだけど、朝飯は届かないよ～？君のよく発注してる宅配レストランにこう言ったのさ。
『今ブラックソウルにいるのはソルじゃなくて違う人。金も持ってないから届けないよーに♪』ってね！」
「……テメエ…オレの飯をお預けにするとはいい度胸じゃねえか…」
大剣とディエースを手に持ってマッドハルトに迫る。しかしマッハルトは笑いながらマ○ケ○サン○を踊る。
「ワッハッハ！なーに！ここから出て買い食いすればいいじゃなーい♪それじゃ、さいなら～。チャチャチャ♪」
踊りながら外に出るマッドハルト。
「野郎～…次あれで来たら弾丸を脳天に１００発ジャストぶち込んでやる…」
イライラしながらディエースをコートにしまった。冷蔵庫からコーラを出して一口飲んだ後、手に持ったままの大剣を背中に背負い、

ＢＬＡＣＫ　ＳＯＵＬから出る。出る際に大剣の柄に紫色で名が刻まれていたのが見えた。

ｅｃｌｉｐｓｅ　（蝕）

それが大剣の名だった。

ソルは空腹を味わいながらも一端ファーストフード店に行き、ハンバーガーを2つ食す。その後、マフィアを追うために一つの街へ徒歩で向かう。向かう先はエザベルシティというソルの居る街のドルンガシティ、及びＢＬＡＣＫ　ＳＯＵＬの南側にある大きな街だ。

「まずはあそこに行かんことに越したことはないな。」

エザベルシティに行くにはドルンガシティの前にあるミハイヤ高原という場所を通らなければいけない。ついでに言うと、この高原には目的であるマフィアのファミリーがいる情報がマッドハルトによってしらされたため、まず第一にここに行くことにしたのだ。ソルは徒歩を続けてミハイヤ高原を目指す。

それから2時間後、ミハイヤ高原に着いた。

「見渡しのいい高原に本当にいるのか？マフィアのファミリーが。」

柔らかい草が生え並ぶだけの高原は見渡しがとてもいい。こんな人に見つかりやすい場所にいるのか？と本気で思う。ただミハイヤ高原は朝の時間帯、殆ど誰も通行しないのだ。仮に姿が見えたとしても距離が離れていればあまり怪しまれもしない。いるのかと疑いながら辺りを見回している内に遠くに人影が見えた。赤いローブを纏

ったエルレイドと、同じく赤いローブを纏ったエレキブルだ。ソルの姿を見るなり歩いて近づいてきた。ソルも黙って歩いて近づく。お互い話せる距離まで来るとエルレイドが最初に口を開いた。

「その大剣、こっちに渡して貰おうか。」

「エクリプスのことか？悪いな。これはどこぞの『乱暴神父』から譲り受けた剣なんでな、渡すことはできねえな。」

2人の会話にエレキブルが乱入する。

「おい、ルシー、イチイチ情け掛けねえでぬっ殺して盗りゃあいいだろうが。」

「今の言葉、撤回しろ。でなければ首を跳ね飛ばすぞ…物事を順序を知らないのか？」

ルシーと呼ばれたエルレイドが鬼の形相をしてエレキブルを睨む。

（コイツ…結構手強そうだな…）

ルシーの眼を見て、数多の猛者を倒してきた眼と瞬時に理解したソル。一方エレキブルはルシーの眼力に体を震わせて後退りをした。

「て、撤回する…」

「よし。さて…ルカリオ、悪いことは言わない。エクリプスと言ったか？その大剣を渡せ。」

「何度でも言ってやる、渡さねえよ。」

「……そうか…」

ルシーがローブから長剣を取り出して構える。エレキブルはローブからボウガンを2つ取り出してソルに向ける。

「なんでエクリプスを狙うかは知らんが、まあいいか、かかってこいよ。『ファミリー』共…」
「正体はバレているか…」
「ゲッ、マジかよ！殺さねえとな！！」

エクリプスを右手だけに持ち、５本指のシャドークローを左手に発動させたまま構える。

便利屋編ミッション1：マフィア捜索開始（後書き）

悪魔狩り編は不定期更新と今、宣言する！

リメイクソル「便利屋編もだろうが。」

シド「更新早くしてよ？」

ごめんなさい、ごめんなさい。

シド「たくっ…」

さて、ここでエクリプスの豆知識を言いましょう。

なんと！「失墜」という意味もあるのだ！そのほかにもいろいろ意味があります。ソルの大剣エクリプスは天体の影なんちゃらを指す「蝕」の意味でいきます。

便利屋編ミッション2：ミハイヤ高原での戦い

「十万ボルト！」

先制にエレキブルが強力な電撃を放つ。対してソルは5本指のシャドークローで振り払う。

「ハッ！」

その間にルシーが長剣を縦に振るう。縦振りを踵蹴りで剣の腹部分を蹴り、弾き返す。

「それで勝てると思ってるのか？」

隙だらけの下半身にヤクザ蹴りを入れる。ルシーは寸前で左手を使ってガードし、攻撃を防ぐ。防御の瞬間をソルは見逃さず、コートからディエースをすぐさま引き抜き、トリガーを連続で引く。しかしその弾丸を通常より速く飛ぶ電撃を纏った矢が弾く。

「エレキボウガンをくらえ！」

「よっと、当たるかよ。」

一体どこからそれだけの本数があるのか、電撃を纏った矢が雨のように迫ってくる。迫り来る矢の雨をソルはエクリプスだけで全て弾く。エレキブルは自分が放ち続けた矢の雨が効いていないことに驚いていた。普通、そんな何十本もの飛んでくる矢を全て弾くなど、ほぼ不可能だ。ソルはそれを成し遂げてしまっているが。

「ガントレット…」

「…！？」

ソルが低姿勢で地を這うように、エクリプスを逆さ持ちにしながら体の後ろに持っていきながらエレキブルに突進し、

「スラストォ！」

目の前まで来たところでアッパーをするようにして飛び上がりながらエレキブルを巻き上げる。

「落ちろ！」

追撃でエクリプスを逆さ持ちのままで右手で腹を目掛けてパンチをする。重力の関係もあって、エレキブルは地面へ一直線に落ちていった。地面に勢いよくぶつかり、陥没させる。

「ガハ…つ、強すぎだろ……」

陥没した地面でエレキブルは気を失った。

「ちっ、驚いて隙など見せるからだ…」

「次はお前だ。」

ルシーが振り向いた先には、エクリプスを背負ったソルが右手に新たな5本指のシャドークローを向けて迫ってきていた。シャドークローを大きく振りかぶり、頭から胴体ごと切り裂こうとする。

「見切り。」

見切りを使い、ソルの攻撃を避ける。反撃に長剣を水平に振り、回

避途中であるソルの胴体を軽く斬った。

「波導弾！」

左手から波導で形成されたエネルギー弾をルシーに向けて放つ。

「サイコカッター！」

対してルシーは念力の力で形成した刃、サイコカッターを飛ばして波導弾を相殺する。爆発を起こしたと同時に2人同時に接近して攻撃を再び仕掛ける。

「ふん！」

両手のシャドークローを大きく振りかぶって×上に交差させる。長剣でガードしたルシーは後ろに低姿勢で下がりながら左手を振り下ろしてサイコカッターを飛ばす。避けきれずにサイコカッターが直撃して体を仰け反らせる。さらに追い討ちに長剣を持った右手からサイコカッターをもう一度飛ばし、今度は砂煙舞わせる。

「…まだ終わってないか。」

「当たり前だ。」

砂煙の中から胴体にサイコカッターの斬撃が刻まれたソルが出てきた。当然出血している。しかし大量に出血はしていない。

「…？サイコカッターは命中したはずだ…」

「ああ、モロくらったが？お前の力が無いだけなんじゃねえの？」

皮肉の込められた言葉をルシーにぶつけた。顔に少し怒りがあるの

が分かり、ソルがニヤッと笑みを含めた。その顔を見て剣速をさらに早めるようにして長剣を握り、ソルに迫った。が、しかし…

「バーカ…」

「…！しまった！」

目に見えない速度でシャドークローを発動した両手をコートに入れて構えていた。まさか他に武器があるとは思っていなかったのだろう。瞬時に黒と白の拳銃、ディエースとウンブラをルシーに向け…ないで小さくジャンプし、ブレイズキックを繰り出した。

「バーニングリボルバー！」

炎を纏った回転蹴りを2回行って防御体勢のルシーを蹴りつける。フィニッシュにウンブラを持ったままの右ストレートが炸裂。防御はまだ崩れていない。

「ガン・インパクト！」

右ストレートをした後の瞬時にウンブラの銃全体が黒い光を発し、銃口から黒色の爆発が起きてゼロ距離のルシーに強烈な振動を与える。

「くっ！」

「隙だらけだ。」

手が痺れて動かせないルシーをディエースとウンブラで蜂の巣にする。弾が次々に命中し、最後に交差させてトリガーを引き、ルシーを吹き飛ばした。吹き飛んだのを確認してディエースとウンブラをコートに入れ、エクリプスを右手に持って吹き飛んでいったルシー

の所へ行く。

「さて、と…あ？いねえじゃねえか。」

周りを見るとあのエレキブルもいない。気配も感じ取れないということは完全に逃げられたようだ。逃げられたというだけに妙な敗北感が襲ってきた。

「ちっ、逃がしたか。波導でも感知できねえし、仕方ねえな。エザベルシティに向かうか。」

高原での戦闘を終えたソルはそのままエザベルシティに向かうことにした。遠く離れた位置に右腕を骨折し、体中血だらけのルシーと気絶したままのエレキブルがいた。

「あの黒い光…明らかに特殊能力や特性といった類ではないな…奴はまさか法力使いか？だが、どちらにせよ敵は敵。一刻も早くドンに連絡せねば…」

次の瞬間テレポートを行い、高原から消え去った。

便利屋編ミッション2：ミハイヤ高原での戦い（後書き）

さあ、法力使いとは？

リメイクソル「いや、分からないヤツなんていないだろ。」

どうでしょうな？今回は短いけどここまで。

悪魔狩り編ミッション2：庭園に潜む竜

ガシャラ！と扉を開けたと同時にあの人形、マリスネットが複数、行列状態で天井から落ちてきた。やはり、どいつもこいつも武器を所有している。相変わらずブラブラした持ち方をして全く意味を成さないが…

「使えてなきゃ意味ねえだろお前等。」

とりあえず近くのマリスネットにヤクザ蹴りを入れて行列状態になっていた連中をドミノのように倒していく。倒れている間にディエースとウンブラを乱射して次々と撃ち抜いていく。残り1体となったマリスネットの頭を掴み、膝蹴りを入れて頭部を粉砕する。黒い液体を噴水のように撒き散らしたマリスネットを投げ捨てて部屋全体を見る。見る限り

ここは廊下であるようだ。壁には絵画が幾つも掛けられている。注意深く辺りを見渡すが特に何も無かった。

「次の部屋に何かあるといいんだがな。」

廊下を真っ直ぐ進んで真正面にある黄銅色の扉を開ける。次の部屋は、なんと、また廊下であった。しかし、違いはあった。一つ、扉が両端に幾つか並んでいる。2つ、所々に掛けられた黒い衣を着て、巨大な鋏を手にした人間の女性が描かれた絵画が怪しいことだ。壁に掛けられた絵画には奥から魔力の気配がしている。何かあると見て間違いない。しかし、今はこの絵画にすることなど何も無い。気になりはするが無視することにし、また廊下を進んでいく。今度こそ「何かあれよ。」と念じて奥の通路にあった赤い扉を開ける。そこで見えた光景は広大な密林とも呼べるほどの庭園であった。

「ありえねえ、何をしたくてこんなに広くしてあるんだよ。」

行くにはまだ早いと思い、一端引き返すことにした。絵画の所まで戻ってきたところで異変に気づく。全ての絵画にあの人間の女性がすっかり消えていていないのだ。絵画には背景しか残されていない。

「なんかあると思った。」

波導を展開して辺りに何かいないかを探る。波導で感知できたものの中に絵画に描かれていたあの女性がいた。数は４人程、波導が導く場所は先程の廊下だ。一つ目の廊下に繋がる扉を開け、エクリプスとディエースをそれぞれ手に持つ。右手にエクリプス、左手にシャドークローを発動させて持ったディエースだ。は目の前には波導で感知した通り、床を浮遊をしているあの女性がいた。彼女らは悪魔の一種である”リリス”だ。絵画とは違い、顔は青く光っており、巨大な鋏が酷い錆に塗れている。

「キャハハハハハ！」

「頭が痛くなるな、この笑い声。」

『キャハハハハハ！』

ソルの姿を見るなり、奇声の笑い声を出して一斉に鋏を鳴らしてこちらに迫ってきた。正面から迫ってくる集団から攻撃を受けないように高くジャンプをして集団を飛び越える。そこからディエースをリリスの集団に向けてトリガーを引くが、衣や顔に当たってもすり抜けてしまい、ダメージが通らなかった。

「無敵？んな訳ねえか。」

ここで連続で鋏を撃ち、どんどんトリガーを引く。鋏は次第に破片を散らし、ソルが接近してエクリプスの刃を叩きつける。ここで鋏が粉砕され、リリスが叫びを上げて消えていった。

「効果ありだな。」

「キャハハ、ハー！」

残りの3体が一斉に鋏をこちらに突き出す。先端が唸りを上げて迫るが、真下にしゃがんで突きを回避する。ディエースをコートにすぐさましまい、シャドークローで左にいるリリスの鋏を掴み、残りのリリス2人にぶつけて壁へ激突させる。握っていた鋏はシャドークローでフルパワーで握り、粉砕する。残り2人のリリスに走っていき、エクリプスを振りかぶる。2体のリリスは左右それぞれに回避し、鋏を手でなぞり始めた。それと同時に、周囲の床から鋏の刃部分が回転して迫ってきた。ジャンプしようとするが、上から鋏の刃部分が回転して迫ってきたのを視認して中断し、ディエースをなぞり続けるリリス1体の持つ鋏に向けてトリガーを連続で引いた。鋏は先程よりも脆く、すぐに破壊できて倒せた。残り1体は刃に切り刻まれないようにステップを繰り返して間を通り抜ける。

「おら、これで寝てろ！」

刃の届く前の位置で足の軸回転を利用して体を回し、エクリプスで回転斬りを行って鋏を粉砕。叫びを上げて消えていった。

「やれやれ。」

全て倒し終えたところで一息し、再び2つ目の廊下を通り、庭園のところまで来た。

「面倒くせえな。やっぱここ行くしかねえな。」
「待ちなさい。」
聞いたことのある声が後ろからした。振り返ればそこにはシドがいた。ソルは腕を組んでシドを睨んだ。
「お前、どこ行ってたんだ？」
「野暮用よ。同族を狩るのと同時に主のところにね。」
「主？」
初めて聞いたという顔をして目を細める。シドは気にせずに衝撃的なことを平然と言い放った。
「そ、主よ。この依頼は主からのものよ。それと…私の主、この城にいるから。」
「…は？まさかブラックフリューゲルとか言うんじゃねえだろうな。」
「さあ？どうでしょう？」
「チッ…教えねえのかよ。」
「簡単には教えられないわ。もしも主を殺されたら困るもの。さて、と。ソル、あなたはこれからこの庭園に行くの？」
「ああ、行く。もう他にはたぶんないからな。」
シドはソルの答えに目を細めた。そして背を向けて去ろうとした。しかし去る直前に立ち止まり、ボソリと警告の意味も込めて小声で言った。
「今までのと一緒にしてたら……死ぬよ？」
「ハッ、オレが死ぬなんてありえねえな。「変な能力」のせいで死ぬかも怪しい体だしな。」

「そう…ソル、しゃがんでくれる？」
「？」
言われるがまま、しゃがみ込む。するとシドは唐突にもソルに抱きついてきた。が、ソルは無反応でシドを横から怪しむ目で見た。シドは誘惑でもするような甘い声で耳に囁いた。
「あなたがここで死なないことを祈るわ。宣言したからには生きて帰ってよね。」
「……すごい怪しいんだが。」
「怪しんでくれて構わないわ。今はね…♪」
（コイツ…なにを企んでやがる？ちっと波導で探るか？）
「探るなら好きにしなさい。探りたければね。」
「…よしとく。能力に頼りすぎるなんて御免だからな。」
「そう。それじゃ、また後で合流しましょう。」
ソルから離れた後、また稲妻を発して消えた。話し終えたソルは立ち上がって庭園に向かって行った。
「ここがヤバイ場所でもオレは全然構わねえよ。相手が悪魔なら狩るだけ、ん？」
遠くに強い波導と魔力を感じ、そこへ向かおうとする。だが、その波導と魔力はもの凄い速さでこちらに向かってきていたため、足を止めた。やがて森の中から巨大な木があちこちに生えた竜がソルに向かって…行かずに無視して通り抜け、庭園に巨大な種を撒き散らして通り過ぎた。

「……」

無視されたことに腹が立ったのか、拳を震わせて竜を追いかけていった。撒き散らした種を全てサッカーボールのようにドリブルをしながらだ。木々がそそり立つ中に入った瞬間、ドリブルをしながらもあちこちの木々に向けてシュートし、ピンポン球のように反射させた。一個だけシュートせず、最後の一個は竜の向かう位置へシュートした。

「ふんふ～ん♪われのわれの可愛い子～♪大きく育ち名を轟かせ～♪」

ソルを無視した竜は歌いながら種を四方八方に飛ばしていた。と、その竜に回転の掛かった種が腹に当たって爆発を起こした。

「ぶぎゃ！？だ、誰じゃ、ぎゃばばばば！！」

発言の最中、反射するピンポン球のように飛んできた種が体中のあちこちに当たり、爆発を起こした。

「誰じゃ、われの邪魔をするぶぎゃふ！」

最後にソルがシュートした特別な種が振り向いた時に顔面にヒット、爆発を起こした。竜は体を震わせて木々の中から出てきたソルに怒声を浴びせた。

「貴様ああ！われの邪魔をしおってえ！何者じゃあ！」

「お客さんがいたってのに無視かよ、ここの庭園主はよ。」

皮肉たっぷりの言葉を竜に送り、精神を揺さ振ろうとした。それで

精神の揺さ振りは成功した。が、一つ誤算があった。それは怒り心頭の竜によるリアルドラゴンテールが直撃し、最初にいた庭園の場所まで吹き飛ばされたことだ。もはや怒りしかない竜の怒声がソルに次々と浴びせられる。

「貴様など眼中にないわ！さっさと死ぬがよいわ！この小僧！！」

「たく、荒い庭園主だこと。」

リアルドラゴンテールを瞬時にエクリプスでガードしたソルは左手で頭を掻きながらエクリプスを肩に乗せ、怒りで瞳孔が開きっぱなしの竜に向かっていった。余裕の態度に木の生えた竜、邪竜”フォレスト”は口を大きく開けソルに向けて唸り声を上げた。

悪魔狩り編ミッション２：庭園に潜む竜（後書き）

次回、フォレスト戦だ。ボロ負けするかもな。

リメイクソル「よーし、頭ぶち抜いてやるから立ってろ。」

や、ちょ、ま、待てや！　ダン！！　「あべし！」

シド「なんで私があんなことをしなきゃならないのよ。」

台本だから…ガク

シド「十万ボルト。」

オーバーキルはよくねえ！

エネミーリスト１：マリスネット　数々の生ける者の殺意、悪意といった思念が触媒体である人形に宿った悪魔。１体１体は弱いが、数で攻めてくるため侮ってはならない。

ｎｅｗエネミーリスト２：リリス　黒いガス上の衣を纏う人間の女性の顔を持つ悪魔。大鎌、巨大鋏を利用したりと、命を刈り取る死神にも見える。なお、衣や顔、手を攻撃してもダメージは通らない。ダメージを与えるには所持している武器を攻撃、破壊しなければならない。

ｎｅｗエネミーリスト３：フォレスト　魔力で構成された木の鎧を纏う邪竜。フォレストは英語で『森』を意味する。現上では特徴を

視認していないために情報はゼロ。

悪魔狩り編ミッション３：ソルＶＳフォレスト

「覚悟しろ！この小僧！！」

木々を大きく振動させるほどの咆哮を放ち、威嚇をした。

「うるせえ…」

その咆哮を耳にしてもソルは退けをとらなかった。フォレストは一方的な怒りで突進し、その勢いで目の前にいる獲物を吹き飛ばそうとする。獲物となっていたソルは高くジャンプし、ディエースをコートから引き抜いて即座に連射する。しかし、フォレストの木の鎧が銃弾を弾くためにダメージは与えらない。

「もらったぞ小僧！！」

急カーブをして頭を迫らせたフォレストの突進を空中で直に受け、そのまま地面に叩きつけられた。追い討ちに爆発を起こす種を雨のように浴びせ、大地が爆発により発生した黒煙で蔓延した。やったかと過信し、その場を去ろうとした。だが、黒煙の中から黒く光る銃弾のようなものが腹部の木の鎧に命中した。その途端、木の鎧から非常に小さい青白い球体が出現し、黒煙の中に入っていった。

「今のはなんじゃ！？まだあの小僧が生きているのか！？」

「小僧小僧うるせえな、おばちゃんよぉ…その声イラつくんだよな。オレとオレの悪魔に喰われろ…」

黒煙が晴れた時、そこに立っていたのは平然とした表情でいるエクリプスを握りしめたソル。突進を直でくらい、コートも少しボロく

なっているというのに体はほぼ無傷でいた。その姿を見たフォレストは歯をぎちぎち鳴らして目をカッと見開いていた。

「まだ生きているか！しぶとい小僧じゃ！！」

「うるせえって言ってんだよこのお・ば・ちゃん・が！」

皮肉屋のソルがキレ出し、邪竜のフォレストもキレている。正直言って低レベルの喧嘩と同じだ。黒い光を放つディエースをフォレストに乱射し、同時に接近していった。ディエースから打ち出されている銃弾は黒く光っており、フォレストに当たる度、青白い球体が直撃場所から出現し、ソルの中に入っていく。その度に体は「癒え」、銃弾の威力が増していった。

「ムゥ…面倒な能力じゃ！少しずつだがわれの魂を喰らっているのか！！」

「ああ、そうだ。これがオレの悪魔の力、そして「法力」の力だ。能力が重複してるのが気に食わねえがな！」

銃弾を撃たれ続けているフォレストは少しでも銃弾が当たるのを回避するため、尻尾を大きく振るい、大地を薙ぎ払った。ソルは直前に高くジャンプをし、回避していた。

「今度こそ貰ったぞ小僧！！」

「こっちの台詞だ大馬鹿が！」

頭を突き出して突進してきたフォレストに対し、体を無理矢理捻って頭にある木の鎧部分にタイミングよく掴まった。

「なにぃ！？」

「ハッハァ！刻んでやるよ！」

チャンスとばかりにハイになったのか、突如ハイテンションになったソル。握り締めたエクリプスの刃から黒いオーラが発生し、その刃を頭の木の鎧に突き立てた。

「ギイアアアアアア！！」

「オラ、ジッとしてろ！」

掴まったまま木の鎧を次々と切り刻んでいく。その最中にも斬ったところから大、小の青白い球体が発生し、ソルの中に入っていく。木片が飛び散るなか、フォレストは大きく頭を振り回して必死に振り落とそうとする。さらに頭周辺に爆発する種を密集させ、一気に爆破させた。

「チッ…」

数十個にも密集した爆弾の爆発に巻き込まれる訳にはいかないため、飛び降りて地面に着地する。頭を一気に切り刻まれたフォレストは怒り狂って爆発する種を辺りに振り撒きまくった。

「この！このクソ小僧！！われの頭を！！」

「うるせえなホント…」

「グオオオオオオオオオオオオオ！！」

再び咆哮を発し、空高く舞い上がっていった。ディエースで尻尾と胴体を撃ち込んでいくが対したダメージはなく、極小サイズの青白い球体がソルの中に入っていくだけであった。フォレストはやがて空に消えていき、目で確認できなくなった。

「……嫌な予感がするな。」

その予感は的中した。空を蔽い尽くす赤い木々が次々と降り注ぎ、辺りを檻のように囲んだ。ソルはその中心部にいる。檻と化した辺りに空からフォレストが降りてきた。黄色く眼を光らせており、近くの空気が振動を起こしている。

「もう逃れられん！！ここで朽ち果てるがいいわ！！」

「うるせえって言ってんだろうが。何度言わす気だコラ！」

エクリプスを構えて突進するが、真横と上から殺気を感じたため、すぐに振り向いて確認をする。

「なに？」

真横からは赤い魔力を纏った葉の刃が次々と迫ってきていた。さらに上からは木の枝が鞭上の剣となり、こちらに飛ばしてきた。四面楚歌、この一言に限る。ソルのいる場所に次々と自然の猛攻撃が直撃し、地面を抉っていく。

「ちぃ…！面倒な攻撃だ！グボ…！」

霰のように降り注ぐ剣と葉の刃を弾き、避けていたソルに腹部に剣が直撃、さらに上から降り注ぐ刃の霰に打たれ、砂煙が舞った。ソルが攻撃を受け、砂煙から出てこなくなったことでフォレストが高飛車な高笑いをする。

「ハーハッハッハッハッハ！！われの勝ちじゃな！！哀れな小僧よ、ハーッハッハ！」

この時、フォレストはもっと早く気づくべきであっただろう。砂煙

の中から黒いオーラが溢れ出ていることに……

「やってくれるじゃねえか…うるさいだけのおばちゃんがよ……」

「ハッハ……なんじゃと？」

体中の所々に痛々しく切り傷が出来ていて、今も大量の出血を起こしているというのにそのルカリオはヨロヨロと立ち上がった。

「あれだけの攻撃を受けて立っていられるじゃと！？貴様何者じゃ！！」

「たく、何度も何度もうるせえって言ってるだろうが…テメエにはこれが妥当だ！」

エクリプスを背に背負って腕をクロスさせた。その途端に体中から黒いオーラが出てきて傷を全て塞いだ。さらにソルを黒いオーラが球体となって包み込んだ。やがて空気が振動を始め、舞っていた葉の刃と木の枝の剣を黒いオーラから出た手に掴まれ引き擦り込まれていった。

「い、一体何が起こっているのじゃ…」

初めて目にする光景にフォレストは後退りをした。球体は少しずつ縮小を始め、ソルと同じくらいの大きさになったところで球体の中から声が発せられた。

「もう容赦なんていらねえよな？これで地獄に落ちろ…リーパーインストール！！」

次の瞬間、球体が衝撃波は発して破裂した。中心部に立つ者は黒いオーラを発しているソル。だが、体の左半分が刃のように鋭利な翼

を持つドラゴンのような悪魔に変貌している。

『チッ…またリーパーインストール失敗か。まあ出力は安定してるし上々か。』

声はエコーボイスのように二重の響きがあり、不気味さを増していた。ソルの変貌した姿にフォレストは目を驚かせて叫んだ。

「き、貴様！魔人か！！」

『今頃気づいたのか？最近のばあちゃんは耳が遠いようで…』

「われはばあちゃんではないわ！！まだ１４じゃこの小僧！！」

『……年頃じゃねえかよ…』

年齢の低さに突っ込みながらも片翼の翼をバサリと羽ばたくだけの動作をする。すると翼から黒いオーラが扇上に発せられ、フォレストが生み出していたもの全てが消え去り、青白い球体となってソルの中に入っていった。

「…！！」

『なんだ？この程度でビビッてんのか？「殺剣」はこんなもんじゃねえぞ…』

「こ…この…クソ小僧ーーーーーーー！！！」

フォレストは捨て身の攻撃とばかりに、鋭い木の刃を体中に纏い、さらに前方に螺旋状に巨木で形成された槌と大剣を配置した。そして「グオオオオオオオ！！」と咆哮を轟かせてソルに迫る。

『うるさいが…一途な直線攻撃じゃねえか。そこは嫌いじゃねえよ。さて…』

背負っていたエクリプスを両手に持ち、×に斬る動作をしてフォレストに斬りかかった！

『殺剣！！』

フォレストに水平斬りを行った瞬間、ソルの背後から４つ、黒い斬撃の翼が迫り、フォレストの巨木をバキバキ！と音を立てて破壊していく。やがて斬撃の翼はフォレスト本体にまで届き、バラバラに切り刻んだ！

「ギアアアアアアアア！！！」

『成仏しな。』

ソルの奥義といえる技、”殺剣”をくらったフォレストは木片と化して飛び散った。倒したと同時にリーパーインストールを解除し、元の姿に戻った。木片と化したフォレストを目にしてその場から去っていった。

「あばよ、地獄で会うとしようぜ。」

「ま…待て…」

「あ？何だよっ…て、ええ？」

木片がバラバラになっているにも関わらず、その木片から声が発せられた。

「われはまだ…終わっていないぞ……」

「んだよ、しぶといな…じゃこれでトドメだ。」

ソルの右手から黒いオーラが出てきて霧状に霧散する。これで木片を全て喰らい尽くそうという魂胆だ。今度こそと思い、二回目のあ

ばよを言い放つ。霧状に霧散した黒いオーラが木片に当たろうとしたその時、木片がカタカタ動き出して一点に集まりだした。

「……第二ラウンド？」

そう呟いてエクリプスをもう一度手にして握りしめる。木片が少しずつある（・・）姿に変化していき、最終的にある姿になった。そのある姿とは…

「われはまだ終わっていなーーーい！！」

さて読者はご存知であろうか？ブイズの中でイーブイの進化系の一種、リーフィアを。今、フォレストの木片であろう物は仁王立ちをしてリーフィアになっていた。何故かだ。その姿を見てソルは地面を叩きながら盛大に笑い出した。

「ブハハハハ！！ちょ、何それ！？ギャハハハハ！！ドラゴンから野菜犬やら猫やらって、ダーッハッハッハッハ！！」

「え？ハイ？……なんじゃこりゃあああああああああああ！？」

謎空間と化した庭園に木霊する叫び。１つは笑い声。もう１つは自分の姿に驚愕する絶叫。その様子を城の屋上からシドが覗いていた。

「あら、かわいい。あんなゴツゴツした木の竜から子猫？子犬ちゃんになっちゃった。…ふふ！」

シドもフォレストの変りように小さく笑った。一方、シドの隣りからは黒いローブを纏い、大剣と大鎌を背負った謎のバクフーンがハンバーガーを食ってその場に立ち尽くしている。

「主、あれ何が起きたと思います？ふふ…」
「あれまかわいいじゃん。それも女の子か。てっきり性別無いかと思ってたわ。ん～まああれだ。自身本来の姿保てなくなって一番維持しやすい姿になったんじゃない？しかしそれがポケモンのリーフィアだなんてな。ま～可哀想、ハッハ。」

シドと謎のバクフーンはしばらくその場で談笑をしていた。
こんな色々な意味での謎空間でソルは依頼を成功させられるのか？
そしてシドとこのバクフーンの関係はなにか？進むべくして得るものは無し。

次回へ続く。

悪魔狩り編ミッション３：ソルＶＳフォレスト（後書き）

出来事

フォレストがリーフィアになっちゃった☆

フォレスト「☆じゃないわ！それよりもこれからどうなるのじゃ、われは！」

リメイクソル「雑務係り決定。（笑）」

フォレスト「ふ・ざ・け・る・な！！」

さて、次回本当どうなるのか？とりあえず次回へ続く。

便利屋編ミッション３：ソルの苦悩（前書き）

更新、怠っていました♪

リメイクソル「まずは頭に鉛玉をガツガツ撃ち込もうな。」

ダダダダダダダダダダダダダダ！！←銃声

リメイクソル「散々遅らせやがって…」

ミ、ミッション３…

リメイクソル「アクション！」←ＢＢＣＳ式

便利屋編ミッション3：ソルの苦悩

エザベルシティ。ここは数々のならず者が集い、遊び、働き、殺しをする裏社会の活発な街である。奴隷売買、密輸、買収、殺し屋、犯罪組織など何でもござれ、である。代わりに表の社会は大きい会社以外それほど活発ではなく、路上にストリートチルドレンが居ることなど当然のことで、所々でストリートファイトを目にすることなど珍しくもない。言わば日常茶飯事なのだ。その街にソルはいた。言うまでもなく依頼で来ているのだから。

突然ではあるが、ソルは先程の先頭である技を使ったことに後悔していた。ある技とは銃全体を黒く光らせ、銃口から黒い爆発を起こさせて衝撃と振動を直接ぶつける荒技”ガン・インパクト”だ。実はあの黒い爆発と光はソルのある力によって発動していた。

「暗黒の法力を思わず使っちまったな。おかげで傷は塞がったが…参ったな。オレが法力使いって他の連中にバレたらシャレにならねえ…」

法力。それが『ある力』である。法力とは元々、仏法の修行を受け続けた者に宿る非科学の力。しかし、この世界での法力はある特殊な体質を持つ人物に宿る非科学の力である。そして法力が扱える者の総称を”法力使い”と呼ぶ。属性基準もあり…火、水、雷、風、地、この五種類の”５大属性”に基準外の暗黒がある。

５大属性はそれぞれ能力が固定されているが、基準外となっている暗黒の法力は能力が個人によって不規則であり、効果や形状などが異なる。これだけ能力が固定されていない特殊な法力である。そして、暗黒の法力は「悪魔の力に近い法力」でもある。ソルのは先程の口頭で分かるように、この暗黒の法力を使う法力使いで、どうやら攻撃を与えた相手の体力を吸収し、自らの糧にする能力のようだ。

腹の切り傷が塞がっているのがその証拠だ。それであの時、調子に乗って法力を使用してしまったことに後悔していた。
法力は公には知られていない力で、極一部の裏組織ぐらいしか法力の存在を知らない。ポケモンの従来の技とはまた違い、戦闘に実用性があるせいで法力使いは日々こういった裏組織に追われることとなっている。本来ならばソルは便利屋を営んで多くの場に顔を出す者ではない筈なのだ。組織に狙われる危険がある中、ソルはなぜ常に命に危険のある便利屋を自ら営むのか？

「まあいいか。来る奴は大抵犯罪者だし、そいつら刑務所にぶち込めば金（生活費）になるしな。」

完全に捕（殺）る気満々の宣言をして街道を歩いていく。…彼が通常の便利屋を営むのは金目当てなのだろうか？それにしてはあまりにも大胆である。

「そこの者、止まりなさい。」
「ああ？」

ディエースをクルクル回して物騒なことを考えている最中に警察用のジャケットを着た女性のコジョンドが目の前に立ち塞がった。腰のベルトには両刃の剣と鞘を差してある。ソルは面倒臭そうな顔をしてディエースをコートの中にしまった。

「あなた、武器を傾向していますね。許可は貰っているのですか？」
「ああ、あるぞ？ほらよ。」
「…拝見します。」

ソルから投げ渡された赤い銃と剣のバッジが取り付けられた手帳を警官のコジョンドは注意深く見た。約１０秒くらいにソルの手に渡

し、「次は背中か肩にバッジを着けなさい。」と言い残して去っていった。

「ちっ、面倒臭え……」

この世界では何時、敵に狙われるか分からないので武器の携行が許されている。しかし、それにはソルの所持しているあのバッジが必要となる。さらには所持者の武器の特徴が記載された国から支給される手帳を持ち、武器の所持携行を維持したいのならその分を他の税とは別に余分に払わなければいけない。
それも、携行する武器が強力であればあるほど酷い金額を支払う破目になる。例えば５０発装填可能のマガジンを装備したアサルトライフルで弾丸の大きさが５．５６ｍｍ。これだと一般人が携行するには殺傷能力が十分過ぎるため、一か月でおよそ９０万以上にも上る。ちなみにソルの携行する武器は全て合わせると３０万代である。エクリプスは美術品の剣として真の特徴を偽り、二丁拳銃ディエース＆ウンブラはそれぞれ弾の大きさが１０ｍｍ、装弾数１０発である。エクリプスは実際、ただの美術品と何ら変わりはない。ソルが手にしない限り…である。

「国の野郎、誰が犯罪予備、犯罪軍を片付けてると思ってやがるんだ。オレ達、便利屋のおかげだろうが…私腹ばっか肥やしやがって……」

憎々しげに皮肉を次々と吐きながら路上を歩いて行き、街壁の隅で寝っ転がっているストリートチルドレンを見回していく。

「弱肉強食…まさにこの様子のことだな。」

ピンと背を伸ばして歩いてゆく裕福な大人と子供、そして便利屋を

営むソル。対して路上に倒れるホームレス、ストリートチルドレン。裕福層から見れば大半が彼らは働く気が無いと思っているが、実際は違う。彼らには行動する力が残されていないのだ。肉体的、精神的にもだ。

「だらしねえな。あんなもんでポケモンはヘコたれるなんて……前まで羨ましい普通のポケモンがこの様か、滑稽だな。」

『お前らの強さはどこに行った？』口にしてるのとは正反対にソルは彼らを少し憎んでいた。彼は周りの存在とは少し違った独創的な考えを持っている。他の力をどんな手段でも手に入れて強くなる者を弱者と呼び、限られた己の力だけで強くなった者を強者と呼ぶ。ただ、昔のソルは前者側の考えであり、今の考えに至るにはある出来事が起きてからである。

「…いや、誰もがジャンヌみたくなれねえか……残念だ。」

とある人物を口にしながら宝石店の窓に映る自分を見て呟いた。窓から目を離して再び歩き出すと腹の虫が鳴った。

「…よし！飯食うか。」

バキッ！と暗くなっていた自分の顔を右手の拳で殴って喝を入れた。イライラした時、気を取り直す時はこれが一番なのである。殴るのはやり過ぎであるが…

どこかに飲食店は無いかと探していると、一軒の西洋料理店を目にした。ここにしようと歩き出した時、足を誰かに捕まれた。

「ああ？」

足元を見ると一匹のフシギダネに掴まれていた。

「お腹がぁ…空きましたぁ……」

この台詞を聞いたソルは脳内で杉田智和（銀時）ボイスでこの後起こる状況を割り出す。

（さあここで質問だオレェ……この４つから答えを割り出してみろやー…

１：飯を食わせる

２：無視して店内に入る

３：神様と称えて食わせる

４：逃走する

ヘイ！４に決まってんだろ！こっちも金はそんなにねえんだ！たまには贅沢してえんだ！振り切って別の所で食う、一目散に逃げるぜヒャッハー！！）

何時ものクール&スタイリッシュな性格など捨ててスプラッターでアホな性格になる。即座に振り払ってUターン、青ハリネズミの如く足を動かすが、あのフシギダネは尻尾にしがみついていた。

「イデデデデ！！尻尾にしがみつくなイテエだろうが！！」

「ごは～ん…食べさせてくださ～い…」

生気の無く、さらに目が死んでいる状態で不気味な笑みをされ、ソルに宿る根本的な恐怖が駆り立てられた。

「お母さーーん！ヤバイよー！こいつ怖いんですけどーーー！」

「お願いです～…食べさせてくださ～い……」

銀さんボイスで悲鳴と言う名の救済の言葉を求めたが、あのフシギダネには全く効果が無かった。

その後、ソルは諦めて先程の西洋料理店にフシギダネを連れて入店した。

しかし本当の地獄は入店してからだ。

便利屋編ミッション３：ソルの苦悩（後書き）

今回、前半シリアスなのに後半はもの凄いコミカルなリメイクソルになりました。

リメイクソル「てかなに？オレ杉田さんイメージなの？」

まだ銀さん口調か…（汗）

まあ初期段階はそうなんだけど、現在のリメイクソルのイメージボイスはアニメ版デビルメイクライのダンテ、森川智之さんがイメージだから。

リメイクソル「…オレって年齢高いのか？」

実際、お前まだ未設定でも予定は２２～７だから。

リメイクソル「ああ、そう…」

それにお前に鈴村健一さんとか関智一さんとか絶対合わないから。

次回はソルの様々な意味での地獄絵図が展開されます。

便利屋編ミッション４：お財布マストダイ（お財布、死ぬべき）（前書き）

はい、ソルの地獄絵図回です。

ソル「最悪だ…今のオレにとって一番出会いたくない奴に会っちまった……」

さーお財布マストダイの覚悟はＯＫ？

ソル「ＯＫ…だが憂さ晴らしにお前の頭を鉛玉でぶち抜く。」

ジャキ！

え？

アーーーーーーーッ！！

便利屋編ミッション４：お財布マストダイ（お財布、死ぬべき）

ほぼ脅されたという形で西洋料理店に入店をした後、近場の席を選んでそこに着席した。椅子はどのポケモンでも座れ、乗ることができるように工夫されている。しかしその代償故か、あまり座り心地は良くない。何時もの事務用の椅子に座れないことにソルは舌打ちをしながらも着席した。フシギダネの少年は蔓の鞭を器用に使って椅子に乗り、ソルと目を合わせた。

「ご飯を食べさせてくれてありがとうございます～。あなたって良い人なんですね～。」

「チッ…お前が執拗に掴んでくるから仕方なく、だ。飯食ったらとっとと行けよ？」

フシギダネの不思議な言葉遣いに変な気分になりながらも、即刻立ち去ってほしいという念と皮肉を込めて言った。しかし、フシギダネの少年は「いいえ。」と、ソルの言ったことを拒否し、続けて口を開いた。

「ご飯を食べさせてくれるんだから何か恩返しをしたいと思いまして～。」

「恩返しだぁ？いらねえいらねえ…」

「僕～この街の全ての構造を知ってるんです～。犯罪者の集まってる所や名前なんて全部覚えてますよ～？」

「お前さらっと危ないこと…ちょっと待て。犯罪者の集まってる所を知ってるだと？」

フシギダネの言葉に目を丸くし、情報を得ようと追及をした。

「えぇ～知ってますよ～。」
「……長剣を持ったエルレイドを見なかったか？」
「知ってますよ～。凄い血だらけでした～～。このお店の真下にその人達の集まりがいますよ～。その人をお探しですか～？」
ビンゴ…！ソルは心で確実な情報を得られたことに少し喜び、得をした気分になった。
「ああ、そいつの組織を潰すのがオレの仕事なんでな。」
それを言い終えるとソルは机に置かれメニュー表をフシギダネの前に差し出し、トントンと叩いた。先程から情報提供のために口を動かしていたフシギダネは腹を空かせた眼で嬉しげにメニューを開き、どれにしようかと選び始めた。その間ソルはディエース、ウンブラの点検を簡易的に行い、不備がないかを確かめた。点検が丁度終わると同時にフシギダネの品選びが終わり、ソルの前にメニューを置いた。
「僕～これにしました～♪」
「ん？どれどれ……」
蔓の鞭で示されたメニューに載せられている品はというと、
≪最後の晩餐会　４万円≫
である。
「ななななななんじいやいこれいはーーーーーーーーーーーーーー！！！！！」

（お財布マストダイ！！お財布マストダイ！！ヤバイ、ヤバイってこれ！！野郎ナンテモン頼んでやがる！！）

物騒な名の宴会用料理にソルは唖然、唖然、唖然、心と現実で絶叫をした。しかも杉田智和（銀時）ボイス、である。それほどまでにソルは頭の中がほぼ真っ白になっていた。

「ちょい待てー！！何てお値段のもん頼んでんだお前ええ！！あれか！？ギャ〇〇ネか！？大食い選手かお前！！」

「え～～？？僕は比較的安いものを頼んだんですけど～？」

「４万なんて糞高い金額が安いワケあるかー！！ブルジョワにとってだろうが安いのは！！」

「でもほら～。この宴会用メニューで一番安いですよ～？」

「それでもここは高級料理店ですけど！！３つ星なんですけど！？どっちにしろ高いことには変わりねえんだよチクショー！！」

頭が真っ白の状態で罵詈雑言を連発するが、フシギダネは適当に流すだけでメニューの変更はしなかった。究極の手段で店から出るという手段があるが、そんなことをしたら変な噂を広められかねない。そのせいで法力を狙う連中に目をつけられたら便利屋とデビルハンターをやっていくことが難しくなり、最悪正体がバレてしまうかもしれない。面倒事を避けるため、ここは大人しく財布を掲げるしか無さそうだ。

※ここからは音声のみをお楽しみください

ちょ、おま…これ、一級品のオンパレードじゃねえか！！どこが一番安いんだよ嗚呼！？つーか大体なあ！最後の晩餐ってのは地球、

人間界におけるキリスト教の聖書に登場するイエス・キリスト最後の日に描かれている最後の晩餐のことを描かれた絵の名を指してんだよ！！そんな名を使ってんだから壮大に決まってるだろうがー！！

あなたって～詳しいんですね～～

オレの仕事には欠かせないことだから仕方なく覚えてんだよ！！後話しを逸らすなあ！！あーくそ！お財布マストダイやめろおおおおおおおお！！！

お気の毒に～～

小一時間後、最後の晩餐会を食べ終えたフシギダネとソルは西洋料理店から出た。

「とても美味しかったです～～♪」

「ああ…お財布マストダイ…♪お財布マストダイ…♪どこへ行くのお金～～…♪」

フシギダネが幸せそうな顔をする中、ごちをさせられましたなソルは、半自暴自棄になって奇妙な歌を歌っていた。何だかストレスを全て出し切ろうとした駄目男のような顔になってしまっている。

「では～お礼にそのエルレイドがいる所まで案内しますよ～。」

「ああ…ああ…なるべく早くな……」

……彼の自暴自棄はしばらく治りそうになさそうだ。それでもソルはフシギダネの後についていき、ルシー達のマフィアを再び追い始

めた。

「あれ～？こんな所に血なんてありましたっけ～？」

あの後からエザベルシティの地下水道にフシギダネとソルは来ていて、道中で真新しい血痕を見つけた。さらに、その血痕からは引き摺られた跡が血となって点々と付着しており、遠くの下水道に繋がっていた。だが、これはフシギダネには見覚えが無いらしい。その言葉を聞いたソルは右手にエクリプスを手に持ち、左手にシャドークローを発動させた。そして彼を警告を知らせようとした。

「ここから先は行かなくていい。後はオレ一人で行く。」

「え、大丈夫なんですか～？」

「オレは万年一人でやってきてる。今更ドジったりはしねえよ。ほら、お前は早く帰れ。」

ソルの言葉を少し間を置いてから信じ、フシギダネは飯を食べさせてくれた感謝の礼を言った後、すぐ近くにあった道路へと繋がる梯子を蔓を使って昇って行った。

「さてと、この血痕は誰の物かねえ……」

フシギダネが梯子を上り切ったのを確認した後、血の跡を追い始め

た。近くで見るとやはり血は真新しく、電球から発せられる光によって鈍く光っていた。点々としている血の跡を追い続け、ついに何も無いように見えるコンクリの壁に辿り着いた。

「仕掛け扉だな、これは。」

乱暴に蹴り飛ばすと案の定、壁の奥には無いはずの空間と、明るい電灯の光が差し込んでいた。しかし、問題があった。空間の存在ではない。電灯の光でもない。その空間、部屋、ＢＡＲのようなアジトの造りではない。問題はその空間、アジト内にいる者全てが血塗れになっている死亡していることだ。

「……誰だオレの仕事を奪った奴は…」

憎々しげに呟き、アジト内の探索を始めようとした頃、足を誰かに掴まれた。足元を見ると、そこには周りと同じように血塗れになっている長剣を持ったエルレイド、ルシーがいた。

「貴様…何を連れてきた……」

「なに？連れてきた？」

ソルの反応にルシーは突然「とぼけるな！！」と怒声を上げた。それで深く吐血をしたが、お構いなしに言い続けた。

「あれは、ゲホ…！あれは何だ！！貴様が連れて来たのだろう！？あの怪物を！！」

「怪物…？」

怪物の単語を聞いたソルは目を細めた後、何か理解したかのように「あぁ…」と静かに言った。

「オレが連れて来たんじゃない。『お前らがあいつらを呼び寄せたんだよ。』」
「な…に……？」
「お前ら、麻薬の真の正体何も知らずに運んでるだろ？快楽に堕ちて人生を破壊するだけだと思ってるだろ。残念だがもう１つあるんだよこれが。麻薬には連中を呼び寄せる効果の奴が殆どある。つまり、お前らは自分で首を絞めたんだよ。」
「そ、そんな…馬鹿な……！」
愕然とするルシーを横目で見たソルは、面倒臭そうに頭を掻いてエクリプスを強く握りしめた。奴らが近くにいるのだからだ。
「おい、そこを動くなよ？流れ弾が当たっても知らないからな？」
言い終えると同時に暗闇の奥から大鎌を両手に持って黒い衣を身に包み、赤い目だけを見せている怪物が４体、姿を現した。ソルの本職相手である『悪魔』だ。
「アビスか…運が悪いなあ、お前ら。同情するぜ。」

便利屋編ミッション４：お財布マストダイ（お財布、死ぬべき）（後書き）

前半はおふざけ。後半はバトル直前でござい！

リメイクソル「やっと戦えるぜ。」

さあ、オサイフノカタキヲトルノデス！！

ちなみに、新登場した悪魔アビスのリストを追加しました。暇がある時にどうぞ。

ｎｅｗエネミーリスト４：アビス　深淵、地の底の名を持つ上級悪魔。

空間を点々と移動する能力を使う厄介な悪魔であり、どこから現れるのか予測が非情に困難である。さらに障害物などもすり抜けてくるため、常に油断ができない。

ただし攻撃の瞬間、僅かに動きを止める癖がある。上手く見切ることができれば反撃を与えることができる。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9113t/

BLACK SOUL

2011年11月17日09時37分発行